断章：現代の無神論と安心立命　　「蝶の雑記帳 138」

このあいだ、フレディリック・グロという人の著書『歩くという哲学』(山と渓谷社)を読んだ。フランスには、『エセー』を書いたモンテーニュ以来、堅実で良質な思索の伝統がある。ミシェル・フーコーを研究対象とする哲学者グロという人は、フランス思想のその流れを汲むと見える。登山を愛するその人が、山登りから散歩まで、一般に人が歩くことをさまざまな視点から考えたエッセイ集である。

歩くことがその人物をつくったと言えるような著名な人物たちばかりでなく、いくつもの種類の歩きが考察されている。明朗で考え深いその文章が読者をひきつけたのだろう、ベストセラーになって多くの外国で翻訳されているらしい。谷口亜沙子という人の日本語訳も原著の文体をよく体現していると思われる。

わたしも読んで、共感し考えさせられるところがあった。しかし残念ながら今、それを落ち着いて考える状態にない。特に教えられるところのあった二三の文章だけでも書きとめておく。

ｉ．「感謝の念」と題されたエッセイ（149～153 ページ）

ここには神という言葉が現われるが、宗教的な神を信じない現代哲学者の、短いが自分の考えをよく言い表わした文章だと思う。全文を引用しよう。

エピクロスによれば、私たちの心の安らぎを支える柱のひとつは、神々の存在である。「神々は存在する」というのだ。

唯物論の伝統の核心に立ちながら、これほど強く神の存在が強調され、肯定されていることに、人は面食らうかもしれない(イ)。なにしろ、ルクレティウスからマルクスに至るまで、唯物論は、教会が煽り立てる不安から我々を解放することに努めてきたのだから。死後の世界への恐れは、容易にわかるように、政治的な安定のために都合よく利用できるものだ。プラトンですら、無神論者は閉じ込めておくべきだと言っていた。人知れず罪を犯し、隠れて悪徳にふけっても、肉体と共に魂が滅びるならば、罰の下しようもないと人々が考えるならば、公の秩序が保たれないからである。

実際、永劫の罰に対する恐怖には、地上的な幸福を台無しにするものがありはしないだろうか。なのに、なぜ、魂もまた死すべきもので、万物は原子の組合せにすぎないと証明したあとになって、神々のことなどにかかずり合っているのだろうか。地獄に落ちるという見通しだけでももう十分に恐ろしく、心の安らかさは損なわれ、生きる喜びに水が差されるというのに？ 「人間の中でもっとも善き人にすら、恐れおののくべき理由は常にある」(*)と（いうのに）。(*) アラン(ロ)の著書『宗教について』にある文。

それでも「神々は存在している」とエピクロスは書く-

— theoi men gar eisin. [神々は、なるほど、確かに存在している]。ただし、とすぐに言うべきだろう。それは、我々を宗教から救い出すためになのだ。エピクロスの言う「神々」とは、無関心な神々であり、陽気で果てしない円舞を織りなす、安定した元素の永久運動のことだからだ。神々とは、ひとつの充溢のことであり、どこかはるかなところで決定的に成就された、不変で、完全な、永続する存在のことだ。社交にすぎない交際から身を引き、ささやかな喜びを味わい、心の通い合う人たちとの小さなつながりを大切にしながら、わたしたちが存在させ、少しでも安定させようとしているのが、まさしくそのような充足である。誰に感謝したらよいのかわからないその思いの先に「神々」がいる。—-そのなにか完全な、ふだんは無限遠点に佇んでいる存在の似姿として我々が身を感じとるような瞬間、充足はいよいよ深くなる。人と共にある神々とは、そのようなものだ。

エピクロスは、このような境地を「カリス（感謝の気持ち）」と呼んでいる（キリスト教徒ならこれを「グラティア（恩寵）」と訳すだろう）。わたしはある山の峠を越えようとしている—-車でも来られる場所だ。だが、何時間もかけて、自分の足でやってきた。水筒に紅茶を詰め、ドライフルーツを持って、朝早く出発してきた。標高差は大きく、道は険しい。歩くというより、一歩ごとに地面から身を引きはがすような感じだった。だが、とうとう頂上に

着いたのだ。その時、――体を酷使したために感覚が鋭敏になっているのか、それとも努力の報いなのか――、私の眼前には、なにか尋常でないほどの美しさをたたえた風景が広がっている。その風景はわたしの中に響きのようなものを生み出し、風景そのものが震えてでもいるようで、――実際にふるえているのは、むしろわたしの二本の足なのだが――、風景と自分が共震する。わたしは泣きそうになる。

その時、物音が聞こえ、振り返る。いや、わたしは、一人ではなかったのだ。駐車場で車を降りたのんびりした観光客ががやがやとやってきては、眼下のパノラマを映像として「獲得」している。「すごい、すごい」と口々に言い、わたしが目に涙を浮かべているのに気づくと、やや気まずそうな顔をする。

だが、彼らには何も届けられていない。彼らが目にするのは、風景の骸骨にすぎないからだ（色や形をざっと見てそれで終わり）。そのような風景には生気が宿ってない。ニーチェは歓喜に満ちて「漂泊者」で書いている。「この風景は我が血潮であり、それ以上のものですらある」（三三八番の断章）。歩く者に与えられる恩恵は、歩くことそのものからくる喜びだけではない。多くの努力をし、多くの汗を流し、徹底的に体を疲れさせたあとだからこそ、目の前に差し出される美しさをまさに自分に向けられたものとして味わえるのだ。「カリス(恩寵)」とは、このわた

しを目がけて、今この時に贈り物が届けられている、という確信を抱けることだ。わたしは感謝の念をもって、それに応答する。せかせかした観光客と、山道を耐え抜いた歩行者は、同じ風景を目にしない。ツーリストは風景を捕獲し、記録し、蓄え、データベースを拡充する。だが、自然の中を行くものは、感謝の念にひたされながら、自分を「手放す」のだ。

永遠の閃光に貫かれるような、そうした瞬間がある以上、その光を存在させ、そんなにも強く輝かせるものがどこかに何かあるはずだ。それが「神々」と呼ばれるものだ。教会を持たない神、称号を持たない神、エピクロスにとって、それが神の存在原理だ。わたしの喜びを、わたしはどこかに確かに預けられなければならない。そうすれば、その喜びはふわふわと漂ったままではなく、はるかな場所で到達された完全無欠なものの反響としての自らを現すだろう。自然界のあらゆる美は、混じりけのない喜びをもたらしてくれるがゆえに、我々に感謝を促す。その感謝の念に方向を与えるものとして、神々が存在するのだ。感謝の念が船をつけることができる港、あるいは拠点であり、その意味や方向を与えられるもの、それが「神々」と呼ばれる。そのようなありがたさには、いかなる従属関係も想定されていない。わたしはただ、世界の美しさを与えられるがままに受け取っていればよく、その贈与の感覚によって、喜びの気持ちはさらに膨らむ。

同じような観点から、クンデラ(ハ)は『不滅』の一節で、「道路」と「小道」の違いについて述べている。「道路」は、ある地点から別の地点へと赴くために使われる。計算に基づいて作られたものであり、距離を消滅させ、スピードを上げ、空間を無視することがその目的だ。どこに道路を通し、いかに舗装するか、すべてはあらかじめ考え抜かれている。路上にいる時間は、短いほどよいとみなされる。よい道路とは、したがって、アスファルトで舗装された、まっすぐなものだ。だが、土地の起伏や地質などの条件も考慮するために、カーヴや迂回路も作られる。「道路というものは、それ自体としては、なんの意味もない」とクンデラは言う。「意味があるのは、ただ道路が結んでいる二つの地点だけだ」。道路とは常に、ここからあそこへ、ある地点から別の地点へと向かうためのものであり、ある場所から別の場所へと行くために張り渡されたロープのようなものだ。

だが、「小道」はそうではない。「小道は、空間へのオマージュである」。だからこそ、道は、その区切り、区切りで、「ひと休みすることへと人を誘う」。小道は、地点を結ぶのではなく、空間を通り抜けてゆく、あの森やこの谷を歩くもののために、その歩調につれて、ゆっくりと風景を切り開く。道がなければ発見はなく、道こそが、谷や森への我々の目を開かせてくれるのだ。

自分の足で歩いてゆくということは、風景に敬意を捧

げることだ。

上の文章には、まだ神という言葉が残っている。しかし、古代ギリシアの哲学者エピクロスが神々という言葉を使うのに対して、グロは、「それは、我々を宗教から救い出すためなのだ」と言う。グロは、エピクロスが神々という言葉で表現しようとした境地を「カリス（感謝の気持ち）」と呼ぶと解説したあと、登山のとき自分の身心に生じた涙がこぼれ出るほどの喜びをその「感謝の気持ち」と同じものだとしている。グロは、現代の無神論者として、神という言葉を使わないでエピクロスを解釈しようとしているのである。つまり、エピクロスを普通言われるように無神論者と見ているのである(イ)。だからわたしは、「感謝の気持ち」と題されたこのエッセイを現代の無神論者の考えの表白だ、と考える。ちなみに、２０世紀前半のフランスの作家アンドレ・ジードは、著書『モンテーニュ論』で『エセー』を無神論の書と論じた。

註イ：エピクロスが継承したデモクリトスの原子論は、世界は原子から成り出来事は原子の離合集散として起きるという唯物論であり、その趣旨は、世界と出来事は神や霊魂なしで存在し生起するという無神論だった。

註ロ：アラン（筆名）は、２０世紀前半のフランスの哲学者。

註ハ：ミラン・クンデラはチェコ生まれの作家。「プラハの春」事変ののち 1975 年からフランスで活動し国籍を剝奪された。小説『不滅』などはフランス語で書かれた。

ii．「安心立命」について述べた二つのエッセイ

*「宗教的精神と政治（ガンディー）」

このエッセイの 203 ページに、ガンディーの同志でのちにインドの首相となったネルーが、「塩の行進」のときのガンディーを思い出して述べた次のような一節が引かれている。

> ・・・静かで、穏やかで、心が決まっていて、なにひとつ恐れていませんでした。

この短い評言は、ガンディーという人が動じることなく決意し行動したことを見事に表現している。今回この言葉を聞いて、「安心立命」をこれ以上的確簡潔に表現することはむずかしい、と思った。わたしは以前、身心不調に陥って動揺甚だしい自分の心を落ち着けるのにたいへん苦労した。そのとき、安心立命という言葉をあれこれ考えたが、その意味をこれほど明確に言い得ていたら、もっとしっかりした覚悟に至っていたかもしれない。

もちろん、静かで、穏やかで、心が決まっていて、なにひとつ恐れない境地になるには、どれほど長くそうあろうと努力し鍛錬する必要があったことだろう。ガンディーのような強靭な心性と人格の人が長い実践的な経験を積んではじめて到達できたことなのだ。わたしは、せめてそれを鑑として努力しなければならない、失敗をくりかえすとしても。

＊「充足の諸状態」

この表題のエッセイでは 147 ページに、グロが次のようなことを述べている。

> 心の平穏さとは、恐れか希望かという二択にもはや心をわずらわされず、あらゆる確信の先に身を置くことである。

この文には「ふつう確信とは、弁護されたり、論証されたり、構築されたりせねばならないものだ」という註釈が施されているから、グロは、そういう「確信」の向こうに身を置くことで心の平穏を得る、と言っているのである。

グロの文章は、「静かで、穏やかで、心が決まっていて、なにひとつ恐れない」ためには、人があれこれ考えて確信を得ようとすることの困難をわきまえたうえで、そういう確信に至らないとしても、ともかく自分の身を確信の向こうに置くことを勧めているのである。安心立命を現代人向きに説いた実践的な方法ということができる。歩く人グロは、躊躇してわるい事態に陥るのを避けるために、考えを尽くしながらともかく一歩を踏み出せ、と説いているのだと思う。これは、わたしのような者にも実践できる立派な安心立命の態度だ、と思う。

2025 年 7 月小暑　　海蝶　谷川修